

若者の力を活かし、定住人口の確保・まちなかの再生を



シリーズ

自治の貌

連載 4

現在の岩手県花巻市は2006年1月に4市町の合併で誕生した。「若者の力を活かし、若者が花巻で暮らせるまちづくり、定住人口の確保」を目標の第一に掲げる上田東一市長は、人が住むまちなかの再生に力を注ぐ。

岩手県花巻市長

上田東一

うえだ・とういち / 1954年花巻市生まれ。東京大学法学部卒業後、三井物産に入社。計10年間、ニューヨークとロサンゼルスに勤務。87年ニューヨーク州弁護士資格取得。ゼネラル・エレクトリックの金融事業系の会社に転職後、2005年に花巻市へ戻り、廃棄物処理会社の代表取締役役に就任。14年1月に行われた花巻市長選に出馬、現職を破って初当選。同年2月から市長（現在2期目）。

[DATA]

花巻市：2006年1月1日、旧花巻市、石鳥谷町、大迫町、東和町による合併で誕生。岩手県の中西部に位置する。人口9万5606人・世帯数3万7649（5月末現在）／面積908.39km²／産業別就業人口比率①12.4②26.6③61.0（15年国調）／一般会計予算額485億3929万円（19年度）／財政力指数0.46／実質公債費比率9.8／経常収支比率88.1／人口1000人当たり職員数9.07（以上、17年度）

旧市町の良さはむしろ残していくべきだ。 市民としての一体感は自然にできる。

人が住む地域として
まちなかを再生

市長は14年2月の就任以来、「若者の力を活かし、若者が花巻で暮らせるまちづくり、定住人口の確保」を目標の第一に掲げてきた。ある意味で地方創生の動きを先取りした目標だが、現在の手応えは？

私が市長に当選して3か月後に、いわゆる増田レポートが発表され、人口問題が全国的に注目され始めた。人口減少の要因は社会減と自然減の二つだが、花巻市における社会

減の幅は少し減ってきた。3〜4年前は250人程度の減だったが、17年度で167人減、18年度で144人減となっている。

一方で自然減の幅は、むしろ増えている。出生率は下がっていないが、出産適齢期の女性の数が減少傾向にあるので、なかなか子どもが生まれる数が増えない。75歳以上の後期高齢者はこれから10年くらい増えていくので亡くなる数も増えていくことは間違いない。そのため自然減の増大はしばらく続く状況だろう。

花巻は、昼夜間人口比率を見ると夜間人口の方が多い。市内の高校生が毎年200人ほど就職しているが、その85%近くが花巻及び花巻周辺に就職する。花巻だけではなく、近隣の市町に就職先が多いことが大きな理由になっている。

市としても社会減対策ではさまざまなことに取り組んでいる。例えばUIJターン者への補助金を15年度から実施。帰って来た人には25万円の補助金を出しており、18年度は16人がこれを利用して都会から戻って

きている。

市外からの就農希望者については住宅の取得に伴う引っ越し費用と改修費用を最大220万円まで支援する制度を作っている。空き家バンクは16年から使っていて、花巻の空き家の数は950軒程度あり、そのうち190軒が登録し、成約は81軒と非常に成果が出ている。

市単独のものでは、子育て世帯について、花巻市立地適正化計画に定める居住誘導区域など、市が指定する区域に住宅を取得する場合、あるいは親世帯と同居、親世帯と近居する場合については30万円補助する制度を設けている。これは昨年度29件使っていたが、本年度は5月31日現在で15件の申請があった。

また、若い人たちが活躍するという意味では、リノベーションのまちづくりを花巻の中心部で展開している。一番有名なのはマルカン大食堂の復活。マルカンデパートの閉店と同時に花巻の若い人が手を挙げて、基本的に彼らの力だけで大食堂を再開させた。地下にはスケボーパーク、1階ではショップを開き、2階は木のおもちゃ美術館を作る計画がされている。

さらに、「リノベーションスクー

ル」を一昨年から実施している。これは三つの空き家を選び、若い人たちが8人ほどでグループを作って、その活用方を3日間検討して、3日目にオーナーに提案するというもの。その中からゲストハウスや中国料理店ができ、7月にもクラフトビールの店が開店する予定だ。7月には3回目のリノベーションスクールを開催する。

リノベーションスクールの受講者だけではなく、中心市街地の公園を整備したところ、そこを利用してのイベントや、宮沢賢治童話村の広大な芝生でコーヒーフェスを開くなどいろいろな動きが出ている。若い人たちの動きに呼応し、市の職員も十数人で勉強会を開いて、リノベーションのまちづくり、まちなかの活性化について一緒にやっていく動きが出ている。

花巻のまちなかに関していうと、立地適正化計画策定に伴う国の補助金及び合併特例債を使っている市の補助金も活用して、まちなかにある老朽化した病院及び看護専門学校を同じようにまちなかの南側へ移転を支援する。病院は回復期の治療を中心に、特に地域包括ケア病床に力を入れている。救急治療については北上



市役所のそばにある花巻城にて。本丸跡は市指定の史跡として保存され、堀跡や土塁が各所に残存している。



花巻出身の童話作家、宮沢賢治直筆の文章を前にして。「歳月を経るごとに宮沢賢治の評価は上がってきている。本当に不思議な人ですよ」。

市にある病院、盛岡の南の矢巾町に移転する若手医大と提携する。そうすると花巻の場合には回復期から高度医療まで全部カバーできる。

病院を郊外ではなく、まちなかに造ることでまちの活性化に結びつく。例えば近隣に大型のドラッグストアも二つでき、食品を含め住民の

生活必需品購入が便利になる。

また、マルカンと同じ通りには東日本大震災の災害公営住宅が今年4月に完成した。国からの復興交付金を活用して30戸整備した。そして1階にコンビニエンスストアを誘致した。災害公営住宅の入居者は高齢の方が多し。まちなかに若い人の声が開けないという話があったので、災害公営住宅の敷地の横に、民間にお願いして、地域優良賃貸住宅という国の制度を活用して子育て世帯向けの住宅を造ってもらった。中学生以下の子どもがいるのが入居の条件で、2LDK、3LDKの住宅を10戸造ったところ、市外の方も含めて35世帯から申し出があって10戸がすぐに埋まった。この住宅があることによってまちなかの人たちは子どもが聞こえると非常に喜んでる。以前と同じように店舗を増やして商業地域の中心になるというのは無理。そうではなく、人が住む地域としてまちなかを再生させていく。10戸に35世帯の応募があったという「まちなかに住みたい人がそんなに多いのか」とみなさん驚く。これがまちなか再生のきっかけになる可能性がある。

待っているのは花巻図書館。現在の図書館は郊外にあり、規模も小さい。これを駅前のJR東日本の土地を利用していただくことについてJR側と協議している状況だ。

県外からの移住希望者を後押し

——定住支援の花巻ならではの特色は？

花巻市では、県内から移る方にはあまり補助していない。例えば空き家バンクの利用者についての最大20万円までの補助制度は県外からの転入者限定。最近では都会ではなくて田舎で暮らしたいという人が一定数いる。そういう田舎に住みたいという人については花巻の良さをアピールしながら、住環境等についても支援し、移住したい思いをもう一押しする。

そのためには花巻の良さを発信していくのが大事。若い人たちが中心となってSNSで情報発信しているが、東京と争うのではなく、地方で住みたいという人たちに発信していく。実際に、地域おこし協力隊で来て、中にはブドウ農家を全部インタビューし、その後も花巻に残ってブドウ栽培している人もいるし、家



今年4月に入居が始まった災害公営住宅にて。1階にはコンビニエンスストアを誘致、近くには子育て世帯向け地域優良賃貸住宅も建設され「まちなかがにぎやかにっている」と上田市長は話す。

守舎というリノベーションの会社をつくる人もいる。

花巻市はある意味でベッドタウン的なところもあるが、ベッドタウンも楽しくなければ人は住まない。我々男性の中高年が喜ぶ施設だけではなくて、女性と若い人にとって楽しいまちづくりをしていかないと今後の花巻の活性化はできないと思っている。

違いの良さを しっかり残して誇りを

——現在の花巻市は4市町で合併したが、特に旧町のコミュニティの強化に取り組んできた。特徴を持った地区が強みのようにも見える。

その通り。旧花巻市と旧石鳥谷町は北上盆地の中にあり、趣は似ているが少し違う。旧東和町と旧大迫町は北上山地の町で、ここは特色がある。東和は非常に人柄が積極的で開放的な部分があり、移住者が多い。芸術家もいるし映画を作っていた方もいる。大迫はブドウ栽培、そしてワイン醸造が盛んなところだ。

よく合併については新市の一体感が強調されるが、私はそれぞれの旧市町の良さはむしろ残していくべきだと考えている。市民として生まれれば一体感は自然に出てくる。私は

旧湯口村の生まれで、生まれる7日前に花巻市になった。旧湯口村に愛着があり、市民として花巻市にも愛着がある。旧3町で生まれた子どもたちも同じだと思う。それぞれ違いの良さをしっかり残して誇りを持つてほしい。

——市長は支所で執務することがあるとか。

議会が開催されない月は3支所に半日ずつ行くようにしている。そのときにはできるだけ地区の方々との話を聞く。初めて聞く課題があって、それを実際に政策に反映させることもある。

ルールを新たに作れる職員に

——市長当選直後の基本姿勢の一つに、「市の職員の能力を最大限伸ばしていく」と掲げていた。現在の状況は？

職員はルール通りに行うのは非常に長けている。一方、ルールを新たに作ることは、他の視点がないとできないので、その部分につ

いてはもっと伸ばしていく必要がある。

その観点から職員を外の組織に積極的に派遣している。農水省や環境省、東北経産局、岩手県庁、早稲田大学マニフェスト研究所人材マネジメント部会、今年4月からは慶應義塾大学大学院にも2人出している。

外の組織を経験することで、新たな気づきがある。職員はもともと素質があるのであと数年でどう伸びるか楽しみだ。

——市長は商社出身だが、市長職のやりがいはい？

職員の力を借りて一緒に構想し、それが実現していくところは醍醐味だ。今我々がやっていることは将来の花巻にとって非常に大事なことで、合併特例債が使え、立地適正化計画で国の支援も得やすくなっている。

また私が市長になってからまちづくり基金も25億円くらい増やし約53億円にしたが、これを今後使っていくことを考えると、しっかりした計画で進めなければいけない。間違った方向に進めては取り返しがつかない。その意味での緊張感はあるし、常に自分のやっていることが正しいのかどうか振り返っている。